

駅前旅館

—— 映画文学人生論

原作：井伏鱒二 (1956-57年) 「新潮」
監督：豊田四郎 (1958年) 脚本：八住利雄
出演：生野次平 森繁久弥 音楽：團伊玖磨
高沢 伴淳三郎 撮影：安本淳
小山欽一 フランキー堺
お辰 淡島千景

宿屋の番頭ってえのは、こんなもんだって
いうのを今から見せてやらあ

森繁久弥は映画『青べか物語』で蒸気河岸の先生を演じている。監督の川島雄三によれば、「新藤兼人氏は、珍しくソフトなシナリオを書いてこられて、私はソフトすぎると思ったけれども、主演の森繁氏は、ひどく感動して、自分で自作の歌を作ったりして、乗り気を示しました。僕にはそれを否定する根拠はなかった」。

若旦那、番頭、課長、重役、社長、警官、総理大臣、ボケ老人——森繁久弥は何をやらせてもそれらしい演技のできる俳優だ。もちろんひとかどの作家らしくも見えるが、蒸気河岸の先生だけはイメージがちがうのではという気がする。

映画を観ていないのにそんな偏見を抱くのはおかしいかもしれないが、私は山本周五郎の原作と新藤兼人のシナリオを読んでいる。原作の蒸気河岸の先生は無口で、なるべくしゃべらないようにしているのに、シナリオの先生は声だけのナレーションのほかに、誰とでも平気で会話をかわしており、けっして無口ではない。原作とシナリオは別物だ。森繁久弥が感動したのは原作ではなく、新藤兼人のシナリオだったのではないだろうか。

山田洋次監督の映画『男はつらいよ』の第九作「寅次郎柴又慕情」及び第十三作「寅次郎恋やつれ」では淋しそうな顔だちの歌子（吉永小百合）の結婚に反対する頑固な父親の作家を宮口精二が



©1958 東宝

駅前旅館

映画文学人生論

演じている。「歌子さんが可哀想だ。手をついてあやまれ」と寅さんに説教されて、頑固な姿勢がぐらつく口べたの作家だ。

私の印象によれば、ぶつくれ舟の青べかを芳翁さんから無理矢理買わされた蒸気河岸の先生は、森繁久弥よりも宮口精二のイメージに近い。

森繁久弥のキャラクターをいかした一番のはまり役は番頭だと私は思う。井伏鱒二原作、豊田四郎監督『駅前旅館』では森繁の演じる番頭が、突然、クビを宣告された直後、「宿屋の番頭ってえのは、こんなもんだっていうのを今から見せてやらあ」と啖呵をきってから次から次へと客引きに成功する技を見せた。素晴らしい名人芸だ。

寅さんの渥美清が観客を幻惑する演技の目標としたのは森繁久弥だったという。時々浮かべる、せつなげな泣き笑いの表情がよく似ているのは寅さんが森繁からぬすんだものだろう。女中部屋で生まれた私生児という森繁久弥の番頭は芸者の子という寅さんに生い立ちに似ている。

『駅前旅館』が好評だったため、森繁久弥、伴淳三郎、フランキー堺の三人が主演の映画が喜劇駅前シリーズとして一九五八年から一九六九年まで二十四作がつくられた。駅前シリーズが姿を消した年に登場したのが『男はつらいよ』シリーズというのも何かのめぐりあわせか。

客を引く宿屋の番頭盆踊り